

辭書と歴史研究

文學博士 松 井 簡 治

先日遠山幹事がお出でになりました、私に國史學會で何かお話をするやうにと云ふ事であつた、特に三上會長からして辭書の編纂に關する苦心談でも話してはどうかと云ふお話がございました、是も考へて見ましたが、辭書編纂の苦心談と言ひましても、私は餘り苦心をした材料を有つて居らないのであります、當然の事で、兎角あゝ云ふものゝ苦心談と言ひますと、何か人事上の變遷とか、又自分の身体の病氣とか、そんな事を言ふのが普通でありますけれども、私は幸か不幸か——不幸ぢやない幸でありましたらうが、四十年も感冒に罹つた事はない、さう云ふ人間が大變困難な目に遭つたと言うでお話をする材料もなし、又人事上に付きましても何も字引を編纂したからどうと云ふことはないのであります、さう云ふやうに考へて見ますると、實は何も材料を有つて居りませぬ、それでありますから妙な問題ですけれど、あゝ云ふやうな問題を掲げたのであります。

併し是は苦心談ではありませんが、斯う云ふことがあるのです、私が辭書を編纂しますのに、一番初めにどの位一体國語の言葉があるか知ら、昔の書物等に見えた言葉がどの位あるか知らんと云ふ事からして、此言葉の索引を拵へました、古事記とか、萬葉とか書紀とか、或は歌ならば三大帖集、或は群書類聚の歌の部

の索引、或は源氏とか、枕の草紙とか、又鎌倉時代でありますれば軍記、其他お伽草紙とか狂言とか、近松とか、西鶴とか云ふやうなもの、總ての言葉の索引を拵へました、それが出来上りましたので、どの位言葉があるかと云ふことが分らぬければ、豫算が立ちませぬから、言葉をさう云ふ風にして拾ひましたらば、四十萬ばかりになりました、さて自分で勘定して見ますると百年で三萬六千五百日であるから、四十萬ではやりやうがない、是はもう少し約めやう、二十萬位にしやう、斯う云ふ考を以ちまして、約三二十萬ばかりの間と思ひまして、一年を三百日、六十五日は休むものとしまして、三百日と見ますと二十年で六千日になる六千日で約二十萬語やりますと一日は三十三位になります、それ位ならば何とか出来ませう、病氣がないものと私は信じて三十三と決めまして、毎日三十三はやりませうけれども、或は一つの言葉でもつて一日或は二日位掛ることもあります、さうすると翌日六十六、三日掛ると九十九になつて終ふさう云ふ風で段々溜つて参りますなか／＼困難である、毎日時間はどう云ふ風にしたかと云ふと、五時間と決めて居る、公務もありますから、それを差引いて五時間と決め、其五時間をどうしたかと云ふと、私は大抵宵に早く寝て朝早く起きる、今日は少々朝寝になりましたが、其時には大抵は三時に起きます、四時五時六時七時八時と五時間、斯うなりますと訪れて來ない、何の用事もない、それでありませうから安心して其五時間の利用が出来ます、利用が出来まするので五時間と決めまして、寒くなると請らぬ話ですけれども、机を自分の寢床の前に置きましてすぐ飛び起きて寢巻にぬくまりながらやります、さう致しますと、さう大儀でない、少々陽が出ると起き出して衣類を着替へる、五時間は餘り間違なくやれました、併ながら今のやう

に段々停滯して参りましては追付くことが出来ませぬので、それを七月八月の休暇でもつて取返します。七月八月で取返すのは、それは夏になりますと日が長うございますので、是は十時間と決めまして、十時間は間違なくやります。勿論十時間以上時間を取れますけれども、頭腦は承知しませぬ、それから残らやつても進行しないのでありますからそれで止めます。十時間過ぎますと後はやらない、さうしますと云ふと七十日ばかりありますから、此七十日で遅れましたのを取返すことが出来るのであります。さう云ふ事を繰返して二十年ばかりやりましたが、幸ひに感冒にも罹らず何も病氣はありませんでした。そんな風でありますから丁度斯う云ふ編纂をしますのは、私は斯う考へて居る、能く言ふ例へば子供を育てるやうな話で、毎日随分骨も折れませうが、どんな親でも子供育ての苦心談をする人はない、つまり毎日段々育つて行くのが非常に楽しみでありますから、一向苦痛と感ぜませぬ、子供の愛の爲にさう云ふ苦痛は忘れられるのであります、私共も字引を拵へるのは毎日面白い、是が出来たと云ふやうにして、悦んで居るのでありますから、一向苦痛とは思はない、さうして大抵出来上りますと云ふと、印刷の方へ送る豫定がなか／＼勘定が出来ませぬから、それで極く安物の改良半紙を買つて来てやつたのであります、それでもつて高さが十二尺になつた時が一冊と決めて、一丈二尺と凡を決めてありまして、是なら一冊分だと云ふ事だ、四冊目になりました所が、段々多くなつて、十五尺ばかりになりましたが、もう一冊増すことが出来ませぬから、據所なく大きな不釣合な四冊目が出来たやうな譯であります、それ以上苦心も何もないのでありますから、さう云ふ話を拜聴すると言つてもちよつとお話する材料を持ちませぬ、それで斯んな問題に致しましたから、是までは

前置で是から本問題に移ります。

あなた方が歴史の専門であるのに、私は専門家でない、歴史専門の方にお話をするのでありますから、或は疾くの昔に承知して所謂遼東の豚と云ふやうな感じがするかも知れませぬが、或は御参考になるか知らんと思ひましたから、申上けるのであります。一体此歴史は、大日本史、或は野史、あゝ云ふものは其人の傳記が分る結構なものであるけれども、其傳記に大切なのは史料であります、而して社會全体を見まするに、其當時どう云ふ飲食をして居つたか、又其時代にどう云ふ着物を着て居つたか、どんな遊びをして居つたか、或はどんな病氣でどんな薬を用ゐたか、或はどんな風俗であつたか、どんな習慣であつたか、其當時の收入はどんなものであつたか、其思想はどんな傾向を有つて居つたか、斯う云ふ風なすつと社會の民間の状態を鳥瞰圖のやうに見るには、何が一番便利であるかと云へば、私は昔の辭書がそれに適して居ると思ふのであります、國史研究に此辭書と云ふものを等閑に附することは宜くないのであります、言ふまでもありませんけれども、昔の辭書と今の辭書は違ひます、何もむづかしい字、或はむづかしい語、さう云ふものを解釋するに辭書が必要でない、多くは書く爲のものです、斯う云ふことをどう云ふ字で書いたら宜いかと云ふのでありますから、其當時の總ての事物などは皆出て居る、それはどんな字を拵めるかと云ふ事の、書くための辭書で讀むための辭書でないのであります、何かむづかしい本を讀んで引かふと云ふのではありませぬ、書くための辭書、さう云ふ目的で出来て居るのでありますから、其當時の總ての事物がそこに列んで居る、動物ら植物も、或は醫學のことも病氣のことも、痲疹ねら何時頃からあつたらうと言つて古い辭書を見る、或

は窠扶斯、窠扶斯と云ふものはありませぬけれども、其當時ないが兎に角どう云ふ病氣がどうだと云ふことを見るには大抵必要なんです、さう云ふやうな風に見るに一番辭書が宜しいと私は思ふのであります、勿論他の方法もありますけれども、あなた方も御承知の『和名類聚抄』と云ふものは當時の社會の事物を知るには一番便利である、和名類聚抄は朱雀天皇の頃でありますから、今より千五百年以上の書物であります、其時代の状態があの本に皆載つて居る譯であります、あれを見れば其時には斯んな藥を用ゐて居つた、斯んな時に斯う云ふ動物がある、あゝ云ふ動物があつたと云ふことが分るのであります、勿論御承知の通り和名類聚抄には十卷の本と、二十卷の本とあります、廿卷は或は後で出來たのでありませうが、それにしても古いものでありますから、其二十卷の本にどう云ふ音樂が其當時行はれたか、或はどう云ふ建築であつたか、どう云ふ官職があつたか皆分ります、さう云ふことが和名類聚抄に依つて平安朝の有様が分るのであります、其他新撰字鏡などはさう云ふ字を引くには適當でないが、終ひには多少參考になる事もあります、男女裝束の部があり鍛冶屋道具の部類もあり農業農具の部類の所もある、さう云ふのが多少歴史上の參考になります、又類聚抄程の参考になりませぬけれども、千六百年位の『類聚名義抄』圓融花山天皇の時でありますから千六百年頃である、あれなども漢字の辭書ではありませぬけれども——勿論目的は漢字を引くのでありますけれども、是も幾らか參考になさるには大變宜いだらうと思ふ、それから『色葉字類抄』千八百四年代でせう、あれなどは尙更參考になると思つて居る、それには動物もあり植物もあり、人の職業或は飲食、或は社寺の事でも何でも其當時の事物は皆列んで居るから、人が多く二卷本だとか、四卷本、十卷本と云つ

て争うて研究します、それは何も物好きでするのでなく二巻本は一番古いのでありますから四巻本には斯う云ふ事物が殖えた、十巻本には斯う風に澤山殖えたと云ふ事が分り、大變歴史的の参考になるのであります、斯う云ふ色葉字類抄もあなた方が歴史研究の資料に供したら宜からうと思ひます、千八百四十年になりましてはさう云ふ類の『籙中抄』が出来ました、是は壽永頃でありますから、其當時の音楽、和歌、風俗等が皆分ります、随つて其後五十年を経ちました後醍醐天皇さまの時には『二中歴』云ふものもあります、或は『拾芥抄』、中園公賢の著者でありますからさうすると後醍醐天皇さまより少し遅れた著書、是等も皆な参考になりますから、あゝ云ふものを度外視してはならぬ、鳥瞰圖的に辭書に依つて其當時の事が分るのであるからあんなものが役に立たぬと云ふのは間違である、足利になりましたは例の『下學集』、あれにも植物、動物、職業の部いろ／＼ある、毎年のやうに下學集などをやつた時で幾通りも出来て居るから其當時々々のものを御覽になれば大變便利だらうと思ふ、それに次いで『節用集』、二千百三十四年頃のもので、是などはいろは物でありますけれども中に内容の分類もありますから、さう云ふ目的に適つて居ります、それに次いで『節用集の大全』と云ふのが延壽の八年に出来て居る、二千三百四十年でありますから其頃の大体の變化が見られます、是等はホンの一端を申上げたのであります。うるさいから一々は申上げませぬ、さう云ふものを一つ御研究になる方が宜しいと思つて居る、もう少し最近で申しますと云ふと、極く新しい明治元年位からの辭書は、恐らく皆が馬鹿にして、輕蔑して御覽になるかも知れませけれども、吾々は面白く見るのであります、それに依つて社會の状態が見られるのであります、明治元年になれば熟語を見ると『王政復古』

など、云ふ字が出て居る、幕府が瓦解したから『瓦解』と云ふ字、『商社』とか『商銀』とか『會社』『軍醫
 因循姑息』『輸出輸入』又藩がありますから、藩から脱け出すことを『脱藩』それから『爵位』『洋服』とか
 『洋夷』とか云ふ字が始めて出来ました、『門閥』『文明』、文明の解釋を見ると「國が開け、良き風俗になり人
 も自ら發明になる」斯う云ふのであります（笑聲）それから數學なども珠算に對して、筆算と云ふ字も出て
 参りまして、筆算と云ふものゝ解釋を見ると之も面白い、「筆そろばん」と云ふのである、珠そろばんに對す
 る筆そろばん、さう云ふ風に明治元年時分には辭書の解釋になつて居る、まだありませんが是は一つ二つ
 申述べたのであります、さう云ふのを拾うて見るとなか／＼面白い、それから明治二年三年はぬきにして五
 年の辭書を見ますと、其時には耶穌などが段々繁昌して來て非常に困ると云ふやうな事があつたから『異
 教蔓延』と云ふ字が出て居る、それから『中興』今の人には氣が付かぬかも知れぬが「天子を尊び盛んにす
 る」と云ふ解釋である、或は『開港』『各國公使』などと云ふ字も出て参りました、又蘭學が盛んだつたので
 『洋學』と云ふもあり、『警備』とか『警巡』とか云ふ字がありました。が警察と云ふ語はありませぬ、次に『三
 職』と云ふのは總裁とか參與とか議定『祭政一途』さう云ふやうな字もあります、大分物が高くなつて『物
 價沸騰』と云ふ文字も出て來る、さう云ふ風に非常に騒いだものでありますから『言路洞開』と云ふ字があ
 り其解釋に「下より申上けることの上へ通ること」それが五年であります、六年七年八年九年を抜いて十年
 になりますと大變に違つた言葉がある、『自主自由』と云ふ文字、自主自由の解釋は「他人の力を借らず吾れ
 と我が身を始末し治める」それから『民權主張』と云ふ字が出て來ます、近頃國體緩和の民間思想など、解

釋して居りますが、「下の勢ひをつけること」さう云ふ風なことで『内地雜居』など云ふ事も出て参りますやかましいのは『公議輿論』とか『權利義務』と云ふ字も始めて出て参ります、勿論『權利』と云ふ字は…加藤弘之さんが『立憲政體略』と云ふ書に、權利と云ふ字は出て居りますけれども、字引に出るのは、一般の人が使ふやうになつてから出るのです、それは明治元年に出たのであるけれども、一般的になつたのは明治十年である、『權利義務』、『民選議員』と云ふ語が出て居ります、それから『縣廳』縣廳の解釋は又面白い、『公吏の役所』、『府廳』は「都の役所」と云ふのである、『政府』と云ふのは「おがみのこと」と解釋して居る、今の人には分りませんが『裁判廳』が白洲、今のと逆である、それから『立憲政體』と云ふ字も出て参りますし、皆さんは『兩院』と云ふと貴衆兩院と思ふでせうが、其時の兩院と云ふのは大審院に元老院、之を兩院と稱して居りますさう云ふのも出て参ります、そんな風に一々拾つて見ると非常に面白く、又どう云ふ思想を有つて來たかと云ふ其思想の傾向を見ます、るのには一番分るのであります、之をつまらぬ辭書を引いて見ても碌な解釋がないと云つて馬鹿にするのは、それは見方に依つて違ふだらうと思つて居る、だから是非あなた方が辭書と云ふものを、歴史研究にはお忘れにならぬやうにせられたい、但し今の辭書はさう云ふ目的に辨らない、それから注意して置きたいことは、此辭書と同様なもので往來物であります、往來と云ふと底訓往來、あゝ云ふものも矢張り文字を教へるのであるが事柄も教へる、文字を教へる爲にいろいろな熟語が集められてある、あれも見方に依つては一種の辭書であります、あゝ云ふのも餘程歴叱上の參考になる例へば底訓往來は、多分鎌倉の末、足利の始めでありませうが、足利や、鎌倉の様子を見るには矢張これ

も非常に参考になる、例へば中には農業の事柄が書いてある、建築の事柄が書いてある。植物の事も、各種の職業のことも書いてある、それから宗教、諸國の物産、器物、料理の事まで書いてある、料理でもあなた方が御覧になると餘程面白いことがあります、焼皮料理なんと云ふものは、大變旨さうな料理である、どう云ふのかと言ふと豚を一匹……まるの儘足を斷ち、腹を割き、腸を取つて中にいろ／＼な野菜物を入れて火にあぶると奇麗に皮が剝けるのでありますから、それを細かに切つて喰べる、旨さうであります、さう云ふ焼皮料理なんと云ふのが庭訓往來にあります、どんな料理をしたかと云ふことを御覧になるに非常に便利である、訴訟手續が出て居る、鎌倉、室町時代の訴訟手續、神社佛閣の事、茶の湯の事、果物、病氣の事、衛生の事、租税の事皆、載つて居るから當時の有様は是で能く分る、以上は庭訓往來を申したのであります、其前の平安朝時代には御承知の『雲州往來』がある、是は獨逸人あたりでも研究して居る、雲州往來ものは非常に大切だと言つて獨逸人の雲州往來の翻譯物もあります、さう云ふ風に歐羅巴の人でさへも注意して居るのでありますから、勿論さう云ふことはあなた方が御注意なさつて居らうと思ふ、往來物を一々言つたら澤山あります、明治になりましたもありません、明治五年あたりののを読んで見ると之も面白い、『維新の御布告往來』それには『公明正大』『言路洞開』『文明開化の盛時』『休暇』『休日』『日曜休業の際』其頭に『人力車自轉車之牽夫』と云ふのは分りませぬが、人力車、自轉車の挽子だらうと思ふ『蒸氣車、火輪船之』^人『皇漢洋を折衷し童兒の時より日本書紀、續日本書紀舊事記、古事記大日本史、日本政紀、日本外史等の國書を涉獵し御國体を辨知し然後四書五經史記前後漢書通鑑、綱目資治通鑑等諸子百家の書を繕閱し神明を

尊崇し國教を固守し宇内天地間に赫々たる皇威の輝かん事を』斯う云ふやうな事などもある、『西洋の學術』
 なども載つて居ります、斯んなのは其當時のことを見るのに大變便利であつて、つまらぬと言つて輕蔑は出
 來ない、明治五年頃の有様がどんなのであつたかと云ふ事を御覽になるのには必要だと思ひます、大体そん
 なものでありますからもう辭書は其位に致しませう、今から三十五年前であつたと思ひますが、私は國學院
 の雜誌に索引のことを書いた事がある、何を研究するにも索引の必要であるも此索引の利用が出來ないやう
 では駄目だと云ふことを三十四五年前の國學院雜誌に書いた事がありますが、今日でもまだ十分索引の利用が
 出來ないではないか、斯う云ふ感じを持つて居ります、何故かと云ふと、歴史を研究なさる人はそれを利用
 して居るかどうかが、ちよつと私の頭に浮んだ一例だけを申上げますと、例へば『日本紀類標索引』でありま
 す、是れは日本紀を御覽になると日本紀時代の歸化人は誰々であつたか、それが分るやうになつて居る、『日
 録』なんと云ふ索引があります、それは書紀であります、續日本紀などにもさう云ふ澤山の類標がある、
 『本紀類標』、或は地名ならば『通抄』、『地名目食器にも類標があります』、『姓名の索引』、『日本後紀人名部類』、
 『續日本後紀類標』、『同人名部類』、『三代實錄分類』、『日本イ史人名部類』もあります、東鏡であるならば
 是も幾通りもあるが、『東鏡類標』、『東鏡類語』、古事記や何かならば古事記の人名類字もあります、延喜式
 を見たいと言へば延喜式の類標大日本史の索引を見るならば『大日本史類標』、神名帳を見ましたならば『考
 證索引』、記録のものであれば『明月の索引』類聚三代類標、保元平治の類標百練抄古語拾遺類實大鏡、増
 鏡、新鏡の類標、元享釋書類字、常山記談の人名索引今昔物語には今昔物語の類字、延喜式の人名帳類字とか

さう云ふやうなものが深山にあります。

さう云ふ風に古人が折角拵へてあるのでありますから何かの研究の上に十分利用すべき筈であるけれども、どうもまだ索引の利用が足りないやうに私は思ふ、さう云ふ風に感ずるのであります、斯う云ふものが研究上一向顧みられない、古人がどう云ふ索引を拵へて居るかと云ふことを始終注意して居りましたならば非常に便利でもあり又参考になるのであります、斯様なことを感じましたから申上げたのであります、それからもう一つ是れも字引でありますけれども、なか／＼むづかしい字、變つた字がある、なか／＼讀めない字がある、例へば大學の大日本史料などに出て居る文字でむづかしいのが、お終の方に墨事一覽と云ふのがある、それから新集藏經音義隨函錄、さう云ふ墨事を見る一の辭書もあるのであります、それは引き難いからちよつと人は見ませぬけれども、實際引例に便利なものがあるのであります、さう云ふものを見る時分には、さう云ふ辭書があるんだと云ふことを一つ御記憶願ひたいのであります、まア大体私の御注意申上けることはそんな事で、深い研究をしたお話をすれば宜いのでありますが、暇がないので、是だけの事を申上げて此席を降ります。(文責在記者)